

平成 24 年環境測定分析統一精度管理ブロック会議議事録

- 関東・甲信・静支部 -

日時：平成 24 年 7 月 11 日（水） 13:30～16:00

会場：土浦市男女共同参画センター 研修室

（茨城県土浦市大和町 9 - 2 ウララ 2 ビル 7 階）

1 開会

2 挨拶

- (1) 茨城県霞ヶ浦環境科学センター 副センター長 井上 三喜夫
(2) 環境省水・大気環境局総務課環境管理技術室 室長補佐 大久保 敦

3 議 事

- (1) 環境測定分析統一精度管理調査について
環境省 水・大気環境局総務課環境管理技術室 室長補佐 大久保 敦
- (2) 平成 23 年度環境測定分析統一精度管理調査結果について
（一財）日本環境衛生センター 環境科学部 主査 西尾 高好
- (3) 環境測定分析における留意点及び精度管理について
（独）産業技術総合研究所 環境管理技術研究部門長 田尾 博明
帝京平成大学 薬学部薬学科 教授 西村 哲治
摂南大学 理工学部生命科学科 准教授 青笹 治

4 質疑応答

（参）：参加者 （助）：助言者・有識者 （環）：環境省

（参）ふっ素の分析において JIS K 0102 34.1 では、比色の対照液として水を発色させた空試験液を用いているが、蒸留操作に関する空試験については JIS に記載されていない。その取り扱いはどうにすればよいか。

（助）JIS では蒸留操作の空試験に関する規定はされていないが、ガラス器具類がふっ素を溶出することは珍しくないので、少なくとも一度は実験室で使用している蒸留器の空試験値を確認しておくことを推奨する。

（参）ジクロロボスの精度管理調査を行った際、ジクロロボスとトリクロロホンの両者が含まれている混合標準液の使用を避けたが、いかがか。

（助）トリクロロホンは、熱分解しやすく、分解物としてジクロロボスが検出されると文献等で報告されている。GC/MS による測定においても注入口温度が高いと分解し、ジクロロボスのピークが出現する。

したがって、トリクロロホンの共存する標準液を使用すると、GC/MS の測定条件によっては試料の定量値が変化する恐れがあるため、使用は避けた方が良い。

- (参) ジクロロボスの測定において、カートリッジを長時間の吸引乾燥させる操作は、結果に影響を与えないか。
- (助) 吸引乾燥を 45 分以上行った機関の操作ブランクのクロマトグラム(9 機関)と試料のクロマトグラム(16 機関)を見たところ、操作ブランクのクロマトグラムにピークが認められる機関はなかった。また、試料のクロマトグラムにおいてジクロロボスの保持時間付近に妨害物質のピークが見られる機関も見受けられなかった。一方、ブランクの指示値が試料指示値の 0.01 以上の機関について調べたところ、乾燥方法はまちまちであり、吸引乾燥を長時間実施すると結果に影響を与えるとは言い難いところである。しかし、長時間の吸引乾燥は、コンタミネーション並びに酸化分解の影響を考慮する必要があると考えられる。
- (参) 市販品の植種液を使用すると有意差はないものの BOD が低く出てしまうとの結果であったが、実際にグルコース・グルタミン酸混合標準液での値が低く出てしまった時にはどの程度まで良いのか。
- (助) どの程度というのは難しいが、市販の植種液を使用すると確かに低く出る傾向があるので、グルコース・グルタミン酸混合標準液を用いて確認する必要がある。
- (参) BOD を測定する際、市販の植種液を使用すると有意差はないが確かに低めの値となる。しかし、かなりの数の機関で市販品を使用している実情を考えれば、使用を認められているという認識で良いか。
- (環) 直接の公定法担当ではないので一概には言えないが、担当者によると、公定法として認められていないとまでは言い切れないであろうとのことであった。

5 閉会